

産業クラスターにおけるクオリティオブライフ(QOL)の視点

米欧亜の参考事例とわが国関連政策への示唆

日本大学大学院総合社会情報研究科

小森 正彦

A Study of “Quality of Life” in Industrial Clusters

KOMORI Masahiko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Industrial clusters in the US, Europe and Asia are equipped with provisions for “quality of life” (QOL), while those in Japan are often artificially located in isolated areas and lack QOL.

Knowledge workers appreciate urban convenience, life amenities, open culture, natural environment, leisure activities, and other aspects of QOL, on top of challenging and rewarding jobs; therefore, a region’s QOL, among other factors, can attract and sustain knowledge workers, thereby promoting innovation and strengthening the industrial cluster’s competitiveness. In return, an industrial cluster can create employment, increase a region’s revenues from personal income and other taxes, provide “civic entrepreneurs” who take the leadership of regional development, and improve a region’s QOL.

This productive cycle between QOL and industrial clusters can be a key factor in improving a region in a sustainable way. Local governments should not forget to improve the region’s QOL when developing industrial clusters in the age of inter-regional competition in the knowledge economy.

キーワード： 産業クラスター、地域、クオリティオブライフ(QOL)、都市利便性、生活快適性

1. はじめに

本稿は、米欧亜における産業クラスターの参考事例を調べることにより、わが国の産業クラスター政策への示唆を得ようとするものである。問題意識は、わが国の産業クラスター関連施策は、とすれば人工立地的であり、Quality of Life(以下 QOL と略す)の視点が不足しがちなのではないかという点にある。

本稿において QOL とは、自然環境、気候、文化、風土、住宅、食事、買物、娯楽、育児、教育、コミュニティといった、衣食住生活全般にわたる、都市利便性、生活快適性(アメニティ)などに関する事項をさす。Standard of Living が生活水準や所得レベルを指すのに対し、QOL は生活の質的充実度を指している。豊かで満足感・幸福感のある、健康的で

精神的にも充実した生活である。

なお Life には生活だけでなく、人生・生命といった意味もある。QOL は看護の世界では、単なる寿命の長さに留まらず、人が人としての尊厳を保ち、よりよく生きること、といった意味でも使われている。このように QOL という言葉は、経済が成熟化し、少子高齢化が進み、人々の文化的欲求が高度化・多様化するなかで、重要なキーワードとなりつつある。

わが国の旧来の産業立地策は、中央から地方への企業・工場移転などが主な関心事項であり、QOL の視点は必ずしも十分ではなかった。各都市のスプロール化を受け、農村部や山間部に工業団地や研究集積が新設されてきたが、往々にして殺風景・無機質で、潤いの乏しい人工的環境となってきた。最近

移民などの貧困層が集まっている。同地区の失業率と犯罪率は高く、就学率は低く、治安が悪化している。一部の知識層はこれを嫌い、他地域に流出している。このようにシリコンバレーは、都市が急成長したときに、良い生活環境を維持できるかどうかの試金石ともなっている。

サンフランシスコベイエリア

ベイエリアとは、サンフランシスコ周辺の、半島部や湾の対岸一帯の総称である。このうちソーマ地区には IT 関連企業が集積し、マルチメディアガルチと呼ばれる。最近では、バイオバレーやバイオコリドーといった呼称もある。

一年中暑くも寒くもない快適な気候である。半島部においては、多様な都市機能が狭い区域に凝縮されていて便利である。地下鉄、バス、ケーブルカーといった公共交通機関が充実している。家並みはカラフルで美しい。金融街もある。各国のレストランや、バー・クラブが多い。ショッピング、映画、コンサートにも事欠かない。美術館、ギャラリーも多い。丘をのぼると瀟洒な街並みの向こうに海が見える。フィッシャーマンズワーフでは魚介類が楽しめる。サンフランシスコの都市ブランドはやはり一流である。

ソーマ地区は、かつては倉庫・工場跡など、荒廃した寂しい地区だった。しかし、低家賃を目当てに、IT 関連などの企業が入居するようになり、街がきれいに蘇った。倉庫・工場跡を改装したオフィスは、アトリエ的な高い天井や広い空間を有しており、クリエイティブな雰囲気がある。ロフトつきのアパートもある。最近は洒落た飲食店も増えた。前述のように、シリコンバレーから移ってきた人もいる。

ベイエリア一帯は、学生街のバークレーにみるように、ヒッピー、ベトナム反戦、ゲイなど、自由奔放で猥雑な文化も受け入れ、都市の刺激と創造性を維持してきた。

一方、サウスリートを含むマリナー郡は、自然豊かな高級リゾート地帯である。ヨットハーバーや瀟洒なレストランなども点在する。緑が多く閑静な高級住宅街に、高額所得者や芸術家が数多く住んでいる。

実はここに、ルーカスフィルムをはじめとする、コンテンツ産業が集積している。シリコンバレーのような競争や拝金主義、ワーカホリックの生活を嫌う、クリエイティブな人々が住んでいる。

なお、ミッションベイにおいては、鉄道操車場跡地にカリフォルニア大学サンフランシスコ校を誘致し、周辺にバイオリサーチパークを形成する計画がある。

このように、ベイエリアだけみても、多様な価値観を持つ若者から中高年までが選択するに足る、様々な生活環境が用意されていることがわかる。

オースチン

オースチンは、かつては州政府と大学の街だったが、デルコンピューターをはじめとする IT 企業を輩出し、シリコンヒルズと呼ばれるようになった。

砂漠がちなテキサス州にありながら、水と緑に恵まれている。気候は温暖である。湖で泳ぐこともできる。教育・育児環境がよい。州・市の所得税はかからず、電力・ガソリンなどの物価が安い。住宅価格も手ごろなので、大変すみやすい。

オースチンは、バークレー同様、かつてはヒッピーの街であったこともあり、新しく異質のものに寛容で、自由な風土があるといわれる。学生も多く、まちに活気がある。実はライブハウスも多い。このような環境が、仕事のみならずライフスタイルも重視するクリエイティブな人々をひきつけ、イノベティブなコミュニティを維持している。

サンディエゴ

サンディエゴは、良好な港湾を基盤に、米国海軍の拠点として、軍事産業などを育ててきた。現在では、バイオ産業や IT 産業（クアルコムなど）が集積している。

気候は温暖で、快晴が多い。リゾート・高級住宅地のラホーヤ地区には、カリフォルニア大学サンディエゴ校や最先端の研究所が集積している。海を臨むオフィスもある。ヨット、ウィンドサーフィンも盛んである。子供にはシーワールドや動物園がある。

ボストン

ボストンは、医療、金融、教育・研究、文化・芸術など、知的付加価値の高い分野における伝統がある。IT 産業、バイオ産業が集積している。ケンブリッジ市周辺はジーンタウンと呼ばれている。

歴史的な街並みがある。大学、美術館、博物館、交響楽団など、文化の香りも高い。高質の都市空間が形成されている。ケープコッドのビーチも近い。秋は紅葉が美しい。近郊にはスキーリゾートもある。中央幹線道路は渋滞が激しかったが、拡幅・地下化し、上部空間を公園などに整備している。高架で分断された市中心部とウォーターフロントを一体化させ、都市改造によりまちの魅力を高めている。

シアトル

シアトルは、スターバックスコーヒーやエディバウアーといった著名企業の発祥地である。マイクロソフト、アマゾンなどの IT 関連や、バイオ関連が集積している。

カスケード山脈のふもと、森と湖、入り江が多く、エメラルドシティと呼ばれる。海洋性の穏やかな気候である。雨は多いが、晴ればレーニエ山をのぞめる。シャチも見られる。釣り、カヌー、スキー、登山などのアウトドアスポーツには事欠かない。シーフードが美味しい。治安もよい。「住みたい都市」調査でも人気が高い。

デンバー

デンバーには、IT 関連が集積している。シリコンマウンテンと呼ばれる。

大陸の中央部に位置しているが、ハブ空港のお陰で、東海岸・西海岸の主要都市へも便利である。軍の基地があるため、地域の通信網がよく整備されている。失業率は低く、治安がよい。住宅価格が手ごろである。州は教育に力を入れている。コロラド大学のあるボルダーは、地域住民が自然保護に熱心で、大自然を愛する知識労働者が集まっている。マウンテンバイク、スキー、登山、カヌーなどの、アウトドア天国である。

ニューヨーク

ニューヨークにおいては、金融・メディア関連の集積を基盤に、IT、特にコンテンツ、インターネットビジネスなどが集積している。シリコンアレーと呼ばれている。市長主導・財界協力のもと、ダウントウンの空きビルに IT 企業などを入居させ、まちの賑わいを取り戻した例である。

様々な都市機能が狭いマンハッタンに凝縮している。アーティストを名乗るクリエイティブな人材が多い。打合せが必要なら、近くのバーで落ち合って議論し、またソーホーのオフィスに戻り、ビジネスプランを仕上げってしまうような芸当もできる。

グレートワシントン

ワシントン DC 周辺には、政府機関、大学などの研究所が多く、IT、バイオなどの企業が集積している。バイオキャピタルと呼ばれている。

国立衛生研究所 (National Institutes of Health) のあるベセズダは、研究者とその家族が住むのに相応しい郊外のまちである。シックなレストランのある高級住宅街である。米国の知識層は一般に、K-12 (Kindergarten through 12: 幼稚園から 12 年生 (高校 3 年生) まで) の教育環境を重要視しており、初等・中等教育が整っている点は申し分ない。ワシントン DC のダウントウンへも、地下鉄で約 30 分と便利である。

リサーチトライアングルパーク

リサーチトライアングルパークは、ノースカロライナの三都市 (ローリー、ダーラム、チャペルヒル) の核に位置する研究学園都市である。デューク大学と二つの州立大学がある。バイオ関連などが集積している。ただしどちらかといえばスタートアップ企業よりも、大企業の研究所が中心である。

かつては目ぼしい産業がなかったが、地域からの頭脳流出を防ぐため、1954 年からの長期にわたり、自然環境を守りながらプロジェクトが進展してきた。IBM、環境保護庁、民間研究所などが、優秀な人材確保のため徐々に立地していった。現在は、森林公園的な環境のなかに、研究所がゆったりと建っている。

る。パーク内は博士の人口密度が全米一ともいわれる。温暖な気候、豊かな自然、恵まれた教育環境、最新の医療施設などが、研究者とその家族をひきつけている。国際空港もある。研究所は静かな環境にあるが、車で15-20分も走れば活気あるまちに着き、気分転換ができる。

その他米国

この他にも、クラスターとはいえないものの企業が集積し、QOLが良好な都市がある。例えばアイダホ州都の小都市ボイジーには、マイクロテクノロジーなどのIT企業が立地している。ロッキー山脈の西に位置し、水と空気がきれいである。乾燥した盆地にありながら、スネーク川の清流のおかげで緑が多い。ゴルフ、フライフィッシング、登山、スキーなどが手軽である。ダウントウンは小規模ながら、洒落た飲食店などもあり活気がある。通勤時間は平均10分といわれる。住宅費や医療費が安く、治安がよい。マイクロの創業者のように、地元出身者には帰郷の念を抱かせ、他州の高学歴の人材も「数年なら」と移住しつつには定住してしまうような魅力がある。

以上のように米国には、仕事と生活の両方を充実させられる多様なまちがあり、知識労働者が自分のライフスタイルに合わせ選択できるようになっている。

ソフィアアンティボリス

ソフィアアンティボリス周辺は、かつては観光シーズンのみ賑わう、高齢化の進む地域であったが、産業や大学の基盤が無いなか、1970年前後からプロジェクトが始まった。現在ではIT、バイオなどのハイテク産業が集積している。大企業や研究所からスピノフした企業が多く存在している。

南仏のリゾート地コートダジュール、ニースとカンヌの間に位置する。温暖・風光明媚ですみやすい。ニース国際空港に近く、欧州内の日帰り出張に便利である。地区内においては、建築物の高さ制限があり、森の中に研究所が散在する形となっている。紺碧の地中海を眺めれば、よいアイデアも浮かぶだる

う。外国人研究者が多く、多様な言語と文化が共存している。「ハイテククラブ」といった交流組織が、オープンなコミュニティを形成している。初・中等教育が充実しており、インターナショナルスクールも多い。テニスコート、フィットネスセンター、体育館、ゴルフコースなども備わっている。ピカソ、シャガールなどの美術館や、ショッピング、音楽会など各種エンターテイメントが充実しており、ワインもおいしい。

ミュンヘン

ミュンヘンは、連邦政府のビオレギオプログラムを活用し、バイオベンチャーを多数輩出しており、ジーンバレーと呼ばれている。ミュンヘン工科大学はバイオテクノロジーの技術移転に積極的である。顧客としての大企業も一帯に立地しており好都合である。

国際空港があり、欧州各地へのアクセスが良い。美しく洗練されたまちである。ビールと芸術の町、百万人の村といった愛称をもつ。美しい建物が独特の雰囲気を出している。学生が多く活気がある。生活環境は良好である。ヨーロッパアルプスに近く、ハイキングやスキーが楽しめる。城、ロマンチック街道などの小旅行も手軽である。

その他欧州

英国ケンブリッジにおいては、ケンブリッジ大学を核として、IT、バイオなどのハイテク企業が集積している。美しい学園都市である。

ロンドンには、ベンチャーキャピタルなどの金融関係をはじめ、サービス業系の集積がみられる。立地企業としても、ベンチャーキャピタルなどへのアクセスが良好で都合が良い。歴史あるまちなみをもつ大都市であり、都市利便性は高い。

イタリア中部・北東部の中小企業集積は、「第三のイタリア」として知られる。気候は温暖である。生活大国イタリアだけあって、衣食住は充実している。

中関村科技園区

北京市内の複数の特別区に、ハイテク企業、政府

系研究機関、精華大学・北京大学などの名門校が集積している。中関村は、秋葉原的な PC 販売店などの自然集積に、政府が関連インフラを整備し発展させたものである。海外留学帰りが、IT 関連などで活発に起業している。

社会主義国家でこそ可能な、大胆なゾーン指定見直しや、官製ベンチャー創設が進んでいる。中国は留学制度を通じ、博士・修士を多数輩出してきたが、米国ほかへの頭脳流出が深刻だった。このため、帰国するに足る魅力的な仕事と生活の場を用意し、人材確保に努めている。中国としては破格の給与、良好な研究環境、留学生向けベンチャーパークや専用の相談窓口、さらには高級コンドミニアムなどを用意している。優秀な人材を確保するつぼを心得ているといえよう。

新竹科学工業園区

台湾政府の設置した地区に、IT 関連のハイテク企業、工業技術研究院などの研究所、交通大学・精華大学が集積し、スピノフが活発化である。

ここでは、シリコンバレーとの人材・情報面での交流が、同地区の発展を支えてきた。先端産業を支える米国留学組をスカウトし、キープし続けるために、活躍の場と破格の給料、良好な庭付き住宅などを用意し、受入環境を整えている。帰国子女には、英語教育の学校も用意している。

バンガロール

バンガロールには、ソフトウェアなど IT 関連が集積している。大学、研究機関も多く立地している。そもそもは軍事産業が基盤となっている。インド人の英語力と数学・論理的思考力を背景として、低廉な理工系人材層が厚いことから、半日の時差を活かし、24 時間体制でシリコンバレーのプログラム開発の下請けなどを行っている。

緯度的には熱帯だが、高原に位置し緑化が進んでいることもあり、気候は穏やかである。インテリジェントビルが並び、空調の効いた快適なオフィスが広がっている。外国からの駐在員向けに、高級コンドミニアムも用意されている。外国人が多いため、

異文化にも寛容という。インフラの弱さは、衛星通信、無停電発電システム、専用の水供給ラインなどで補完している。

シンガポール

シンガポールには、多国籍大企業のみならず、IT・バイオベンチャーが集積している。各種研究所も多い。

都市国家であり、狭い空間内に都市機能が集中しており便利である。飲食や買物には困らない。アクセスのよい国際空港と、優れた港湾機能により、世界中とネットワークを結び、資源不足を補完している。治安がよく、熱帯のビーチも近い。

その他アジア

韓国ソウルのテヘランバレーには、経済危機以降、IT 関連ベンチャーの集積が進んだ。首都ソウルの一角に位置しており、都市利便性が高く、企業・研究所などへのアクセスも良好である。

サイバージャヤは、マレーシア政府がマルチメディアスーパーコリドー計画の一環として、椰子のジャングルを切り開き新設した情報産業都市である。新設の空港とクアラルンプールの中間地点にあるが、都市機能をはじめとする QOL は必ずしも高くない。人工立地の問題点であろう。マルチメディア大学を新設したものの、IT 技術者の不足がボトルネックとなり、外国企業の誘致は思うようには進んでいない。

3. わが国の状況

わが国は戦後懸命に生活水準を向上させてきた。しかし、研究・産業集積の立地をみる限り、人工的で QOL が不十分なこともあるのではないだろうか。例えばつくば研究学園都市は、人工都市のため様々な問題を抱えている。まちは魅力に乏しく、身近な商店街も充実していない。若者は休日には東京まで出かけていく。公共交通はバスのみで、本数が少ない。乗用車の利用が主流だが、通勤時には幹線道が渋滞する。企業誘致が主関心で住宅整備は劣後扱いだったため、研究者や従業員の住宅が不足がちである。機械的で人間的な憩いの空間が乏しく、自殺も

多く、都市としての成熟度が低い。研究者は数年間の派遣で替わることも多く、企業の通勤族も根付かないため、愛着をもって地域を改善しようとする人もなかなか現れない。

新事業創出促進法に基づく「高度研究機能集積地域」(旧頭脳立地地域)をみると、表 2 のように全国で 34 にのぼる地区が指定されている。

その平均面積を計算すると、370ha とかなり広域である。各中心エリアから最寄り駅(あくまで最寄り駅であり、必ずしも近郊で最も利便性の高い駅とは限らない)までの直線距離を計測し単純平均をとると、およそ 3-4km であった。なお周辺環境は、丘陵地帯、農地、工場地帯、住宅地などである場合が多い。なお、同じく新事業創出促進法に基づく「高度技術産業集積地域」(旧テクノポリス地域)は、複数市町村単位を指定するもので、「おおむね 13 万ヘクタール以下」と、それ自体が広域分散的である。

また、経済産業省の産業クラスター計画は、局毎の管轄エリア全域が対象となっている。このため文部科学省の知的クラスター計画をみると、例えばけいはんなや彩都へは、電車のあとバスやタクシーで長距離を移動しなければならない。

これらは、産学官連携や知識創造の中心地として、わが国の競争力を担っていく役割を負っている。しかしその立地は、工業団地や大学などを活用した経緯もあり、全般的に郊外型である。全国各地でスプロール開発が進んだため、大規模実験用地を手当てするには山間地しか残っていない場合もある。既に確立された分野であれば、隔離された環境で研究に没頭することもよいだろう。しかし、産学官「連携」のもと、ナレッジを融合し「新結合」を生むのには適しているだろうか。

全くの無からの新規立地は、結局人工的で不自然な面を免れ得ない。山林を切り開いた新規立地では、不足しがちな学校やアメニティ施設を整備しようにも、今日では自治体の財政的余裕がない場合も多い。QOL の備わったサステイナブルなクラスターとするには、既存の自然集積を活用することが有効であろう。

わが国でも、うまく機能している産業クラスター

には、QOL の要素が確認できる。例えば札幌は、ITベンチャーが駅北口などに自然集積し、サッポロバレーと呼ばれている。道経済の中心として、都市機能が集中している。空港アクセスは良好である。周辺には大自然が残っている。海山の食材にも恵まれている。スキーも手軽である。冬こそ寒冷だが、梅雨がなく、夏は快適である。地元出身者には寒冷な気候は問題ではなく、内地出身者でここが気に入って居着く人も多い。開拓時代からよそ者を受け入れてきた、自由で開放的な風土があり、気候が厳しいため互いに助け合う面があるともいう。

福岡にも IT 関連が自然集積し、大名地区は D2K と呼ばれている。九州の中心地であり、都市機能が充実している。空港アクセスは地下鉄により大変良好である。ラッシュが少なく通勤が楽である。食べ物は美味しく、物価が安い。海や山が近い。海に面し交易都市としての歴史をもち、アジアとの活発な交流にみるように、オープンな風土がある。社会人の地域内定着度や、学生の地元就職志向が強いのは、生活のしやすさの表れだろう。

渋谷・青山周辺は、IT 関連が自然集積しビットバレーと呼ばれる。交通は至便である。街のイメージもよい。カフェが多く、固定費のかかる自前の会議室を持たずとも打合せに便利である。特有の若者文化と、大都会の刺激がある。レストランなどが、夜中も開いており、時間に制約されずにすむ。

なお、「オープンな風土」は、浜松の産業集積でも指摘されている。同地は、豊田佐吉、本田宗一郎、鈴木道雄など多くの起業家を輩出している。開放性は、若者やよそ者に活躍の場を与え、地域を活性化させる、重要な要素であると考えられる。

4 . 若干の考察

米欧亜の比較

米国の各都市は、最初から QOL が高かった訳ではない。欧州の移民が新大陸に流れ着いた頃は、多くの人々は劣悪な環境で生活していた。フィラデルフィアやニューヨークには、暗く非衛生的なアパートが多かった。米国は、長い時間をかけて QOL を改善させてきた。東海岸に飽き足りない人々は、西

海岸に新天地を求めていった。

米国の人材流動性は高い。移民も多い。比較的気軽に転職や引越しをする。「狩猟民族」にたとえられるように、モビリティが高い。U-Hallのトラックに家財一式を積み込み、自分で運転しながら引っ越し人をよく見かける。わが国と異なり、住宅市場の層が厚く、家族向けの賃貸住宅も豊富である。

米国には、知識労働者が自分の好みに応じ選べる多様な都市のプールがあり、内外から多様な人材が集まってくる。知識労働者は、自らの嗜好やライフスタイルにあわせ、住むまちを自由に選んでいる。

特筆すべきは、市民起業家 (Civic Entrepreneur) の地域おこしに対する貢献である。市民起業家とは、教育、福祉、文化、環境など、地域コミュニティの問題解決のために活動する、地域のリーダーである。シリコンバレーであればターマン教授、オースチンならコズメツキー博士といった篤志家をさす。ターマンは大学人だが、ヒューレットパッカードを育て、リサーチパークをつくり、ハイテク産業を育成した。コズメツキーは、テキサス大学ビジネススクールの学長をつとめるとともに、起業家・エンジェルとしても活躍した。彼らは、利潤動機に溺れず、高い精神と徳を持ち、地域の改善に骨身を削り、指導力を発揮してきた。

なお東(2001)は、米国における地域経済振興のための誘致政策を、以下のように3レベルに分類している。

表3 誘致方法の3類型

誘致形態	代表例	雇用創出	発展性
1. 工場・研究所誘致	リサーチパーク	短期間で多	小企業流出のおそれ
2. 起業家・ベンチャー企業誘致	オースチン・ニューヨーク	中期間で多	大
3. 科学者・技術者誘致	初期のシリコンバレー	長期間を要す	大

(一部改)

工場・研究所誘致は、最も安易な雇用創出手段である。誘致企業がさらに大きく発展する度合いは低い。誘致企業が地域に根付くかどうか不確実である。これは、いわば調理済みの弁当を買ってくる方法で、空腹には即効性がある。しかし、次はまた別の弁当を買ってこなければならない。皆が同じ弁当屋に殺到して、高値で小さな弁当を買わなければならないこともある。事実リサーチトライアングルパークは、良く設計された好環境の研究集積だが、必ずしも企業のスタートアップやスピノフは活発ではなく、経済活動はやや静的である。

起業家・ベンチャー企業誘致は、地域に起業しやすい環境を整え、事業が軌道に乗った後も企業に居ついてもらう方法である。スタートアップ企業は、急成長し大化けする可能性がある。即効性には劣るが、将来の発展性には優れている。いわば肉や野菜など素材を買ってきて、手間暇をかけて料理する方法である。コズメツキーのオースチンテクノロジーインキュベーターなどがこれにあたる。

科学者・技術者誘致は、さらに根源的な方法である。ターマンが半導体を発明したショックレーをパロアルトに招いたように、ハイテクの種となる人材を誘致し育てる方法である。いわば農園や牧場を買って、素材からつくり上げるものである。事業が軌道に乗れば、自らよい素材を生産し、弁当屋に売って儲けることもできる。長期を要すが、効果も大変高い、というものである。

結局、促成栽培的な誘致施策は、地域振興効果も低く、根本的解決とはならないといえよう。

欧州は、米国ほどには流動性が高くないのだろう。例えばソフィアアンティポリスでは、1980-90年代の不況時に、IBMなどが解雇を行った。しかし彼らは、自ら創業するなどして、快適なこの地を家族とともに離れようとはしなかった。これが以降の基盤を形成している。

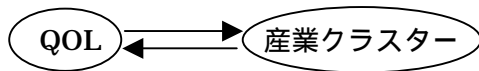
人工的につくられたソフィアアンティポリスを根拠に、産業クラスターは人為的につくれる、という主張を聞くことがある。しかし Keeble・Wilkinson (1999) によれば、同地も当初は人材不足などから「失敗」であったという。その後ダウンサイジング

で大企業の人材が放出され、またニース大学の立地などがあり、徐々に小企業が内発的に生まれていった。30年という長い年月を経て、ようやく自然集積的な姿として馴染んできたというのが真相であろう。その長い試行期間を許容させたのが、ひとつにはQOLの充実度だったのではないだろうか。フランスは巨額を投じ全国に多くのサイエンスパークをつくってきたが、必ずしもすべてがうまく機能している訳ではない。ソフィアアンティポリスも、QOLがなければ、とっくに崩壊していたのではないだろうか。

アジアの都市は、過密な人口、脆弱なインフラなど、必ずしもQOLが高くないこともある。しかし、政府が優秀な頭脳を呼び戻し定着させるため、きちんとQOLの視点をもち補完整備しているように見える。

QOLと産業クラスター間の好循環

以上より、うまく機能している産業クラスターには、次のような好循環のサイクルが存在すると考えられる。



すなわち、QOLが高ければ、他の要因とあいまって、知識労働者を惹きつけ、定住させ、イノベーションを誘発し、自然かつサステイナブルな形で、当該産業クラスターを含む地域の競争力を高められる可能性がある。翻って、産業クラスターが雇用増、所得増と税収増をもたらせば、地域に活力が生まれ、QOLを一層向上させることができる。さらに、知識労働者が産業クラスターに集まりコミュニティを形成するなかから、地域に根ざしその問題を真剣に考え、知恵を出しQOL改善に取り組む、市民起業家的な人たちが現れてくれる可能性もある。

地域のQOLが高ければ、成功者がその地に残りロールモデルやメンターとして後進を育成したり、エンジェルとして投資を継続したりする可能性も高まる。逆に、人工的で不便な立地では、そもそも企業誘致は進まず、知識労働者が根付かず、富が生まれないまま産業クラスターとしての活力が失われて

いくおそれがある。

したがって、QOLの存在如何は、地域としてのサステナビリティにも関係してくることとなる。前述のサンフランシスコやニューヨークは、仕事(ITベンチャーなど)が街を蘇らせた事例である。

知識労働者とQOL

自由な労働市場を前提とすれば、知識・技術を持った人々は、良好な仕事・生活環境を選ぶことができる。クリエイティブな人々は、収入のみならず、余暇やライフスタイルも重視する傾向がある。地域のQOLが高ければ知識労働者をひきつけることができる。知識経済時代の価値観は、大量生産時代のそれとは異なっている。

Florida(2002)は、クリエイティブクラスの価値観は、個人主義、能力主義、多様性とオープンさにあるとしている。彼らは実は時間に追われており、酔い覚ましの時間も勿体ないので、アルコールで酔い痴れるよりも、カフェでの語らいや、サイクリング、アウトドアスポーツといった活動的な余暇を好むという。彼らは、仕事から心を開放するひとは時は渴望しているが、その際にはアクセスのよさなど、単位時間当たりの「レジャーの効率的な活用」を求めているのである。

ライフステージ的にみれば、例えばITコンテンツ作成のアーティストには若者が多い。徹夜で働くこともあれば、会社に来ないこともある。気の合う仲間と、刺激が必要である。夜になると誰もいない街では居づらい。イノベーションは9時-5時で発生するわけではなく、不断の活動である。ハイテクベンチャーの若者は、自分の能力を試す仕事と、その緊張をほぐす余暇が必要だろう。デジタルな効率化で浮いた時間を、高質のアナログライフに振り向けたいであろう。家族持ちの研究者は、生活環境のよい郊外のコミュニティに住みたくなるだろう。子供が巣立てば、観劇や病院など、まちなかの生活が再び便利となる。その際、配偶者の決定権限も大きいことだろう。

知恵の時代の都市再生検討委員会(2000)は、「知恵ある人々」は、「その知恵で裏打ちされた生活の質

を求めるとしている。「快適さ、美しさ、多様な欲求に答えるまちづくり」が必要で、それがまた新しい需要、生活を豊かにする産業を生み出すこととなる。知恵の豊かな人々は、「自らの多様な価値観にこだわった生き方」をするため、「仕事や生活のニーズを満たすサービスやアメニティがそろった都市に優秀な人材が集まる」ことになる。そのためには、多様な住宅や働く場の選択肢を用意し、自由に選べるようにする必要がある。都市が「知恵の豊かな人々」から選ばれ、「知的交流空間」が形成されれば、彼らが個性と創造性を発揮し、対面接触を通じ刺激があって、「知価産業」(知識と知恵を活かして価値を生み出す産業)を支えてくれる。

共創と響働

クラスターにおける諸活動は、機械やロボットではなく、人間によるものである。全くの真空状態では生きてゆけず、無から有は生まれない。地域の仲間との共感、ライバルへの対抗心、知識労働者間の対話と触発といった、「接触の利益」が鍵となる。モノは箱に詰め込み、カネは電量化し、情報は圧縮して送信できるが、創造的なヒトには動機づけや快適性、充足感などが必要である。

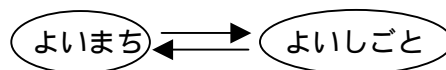
Porter (2001) は、産業クラスターにおける Competition と Cooperation がプレイヤーを触発すると述べている。これに対し清水 (2003) は、「共創」と「響働」を唱えている。前者はいかにもアングロサクソンの響きがあるが、後者はわが国の風土にもよく馴染む言葉であろう。いずれにしても、知識経済に向け、人と人との相互作用が重要度を増しており、QOL はその環境をサステイナブルな形で支えてくれるものと考えられる。

わが国地方自治体などへの示唆：「よいまちとよいしごと」

「農耕民族」のわが国は、米国ほどには人のモビリティが低い。だとすればなおさら、定住地域の QOL 改善が必要になる。地方自治体は企業誘致までは積極的だが、「その後の活動は企業本位で」という建前のもと、立地後の交流や環境整備がおろそ

かになり、企業との関係が疎遠になりがちといわれる。

地域の魅力、QOL は地域間競争に勝つための必要条件である。QOL を高めるには、まちなかに職住遊学を混在させ、そこに貴重な地域資源を集中投下することが有効であろう。一旦都市ブランドやまちの誇りが形成できれば、企業としてはそこに立地すること自体が信用につながり、仕事がしやすくなり、定着するようになる。仕事はまちに所得と活力をもたらす。市民起業家が活躍する場も生まれる。「よいまち」と「よいしごと」の好循環である。



よい生活環境と仕事場が備われば、米欧などに流出したわが国の頭脳を呼び戻し、地域間の人材獲得競争に勝つ可能性が高まる。

ただし地方自治体の役割は、あくまで環境整備にある。もちろん、自発的な「最初の一步」を後押しすることは重要である。しかし、その後も自らがプレイヤーになろうとすると、民間企業や市民といった本来の活動主体を妨害することになってしまう。地方自治体はむしろ、民間企業や大学、市民が自発的に始めた活動が、持続的にうまく転がっていくよう、促進・支援するのが役目である。

産業クラスター形成には数十年かかることも多い。実際今日まで、シリコンバレーは五 - 六十年、ソフィアアンティポリスは三十年、バンガロールで二十年かかっている。促成栽培では太い幹は育たず、すぐ枯れてしまう。性急に人工環境を一から無理に造り上げるのではなく、自発的に始まった自然集積の形成を手助けしながら、気長にその成長・発展を見守る姿勢も必要であろう。

参考文献

小門裕幸『エンジェル・ネットワーク』中央公論社、1996年。

清水博『場の思想』東京大学出版会、2003年。

知恵の時代の都市再生検討委員会『知恵を活かし知恵を育むまちづくり報告書』経済企画庁、2000年、1-11頁。

東一眞『シリコンバレーのつくり方』中央公論新社、2001年、137-140頁。

前田昇、計良秀美「クラスター事例のイノポリス形成要素による回帰分析」『文部科学省科学技術政策研究所ディスカッションペーパー』第28号、2003

年、1-11頁。

Richard Florida, “*The Rise of the Creative Class*,” Basic Books, 2002.

David Keeble, Frank Wilkinson, “Collective Learning and Knowledge Development in the Evolution of Regional Clusters of High Technology SMEs in Europe,” *Regional Studies*, Vol. 33(4), 1999, pp. 295-303.

Michael E. Porter, “*Clusters of Innovation*,” Council on Competitiveness, 2001.

2004年2月02日受理

2004年2月23日採録

小森 正彦

日本大学大学院総合社会情報研究科 博士後期課程